広島経済大学研究論集
第43巻第3号　2021年3月
http://dx.doi.org/10.18996/kenkyu2021430305

佼成図書館蔵『めうほふれんげきやう』の -t 入声

坂　水　貴　司*

1.　問題の所在と本稿の目的

1.1　-t 入声

中国語中古音における音節末の -t（舌内入声韻尾。以下「-t 入声」と呼称する）は，現代日本漢字音において仮名チ・ツで表記され（「イチ（一）」「キチ（吉）」「ハツ（発）」「クツ（屈）」など），発音上も和語のチ・ツ（「ミチ（道）」「マツ（待つ）」など）と区別がない。

しかし，少なくとも中世以前における日本漢字音の -t 入声は，和語のチ・ツとは異質のものであったことが知られている。橋本進吉は文禄元（1592）年版ローマ字本『ドチリーナ・キリシタン』において，和語のツが「tçu」で表記されているのに対して，-t 入声が「taixet（大切）」「guedat（解脱）」「jixet（時節）」などと「t」で表記されていることを指摘し，「入聲のツを t と書いて，普通のツ（tçu）と區別したのは，發音に相違があつたので，やはり文字通り t と發音したのであらう」と述べた[1]。

和語のチ・ツと区別されていた段階の -t 入声について林史典は，九条家本『法華経音』（平安末期写）において，先行母音が i, e, a, o の場合には -t 入声がチ表記され，先行母音が u の場合には -t 入声がツ表記されていることを指摘し，先行母音に調和した二種の「寄生母音」をもっていたことを指摘した[2]。そして法華経音義諸本の -t 入声表記は，時代が降るにつれて，奥寄りの先行母音のものから順にツ表記に統一されることを指摘し，-t 入声が先行母音との調和を捨てて「寄生母音」が一種類に統一されることを示した[3]。

これを受け，肥爪周二は，キリシタン資料の「-t」表記や，声明古写本において -t 入声・-k 入声に独立したピッチが与えられていないと解される事例[4] を勘案し，二種類の寄生母音の音価について [-tɨ̞][-tʉ̞] のような無声母音を付加する形で再解放が行われていたと推定する[5]。

1.2　基本的な字における -t 入声の開音節化

鎌倉時代の親鸞（1173–1263）の字音直読資料（漢文を中国語語順のまま，字音で読む資料）では，入声を示す声点の形式として「入声急」「入声緩」が用いられている。その使い分けは，次の通りである[6]。

入声急：開音節化[7] していない -t 入声
　　入声の促音
入声緩：開音節化した -k 入声
　　開音節化した -p 入声

ところが親鸞の字音直読資料，西本願寺蔵親鸞筆『観無量寿経註』（略号観）・『阿弥陀経註』（略号阿）では -t 入声字であっても，「一」「七」「八」「日」などの基本的な字[8] には，入声緩点の加点例があることが指摘されている[9]。

【一】一(入緩)巻(平)（観2-1），一(入緩)一（観10-2・観15-2），見一(入緩)寶像（観28-3），第十一(入緩)観（観41-1），若(入緩)一(入緩)日（阿8-6）
【七】第七(入緩)観（観26-3），經七(入急)七(入緩)

* 広島経済大学教養教育部助教

日（観56-4）

【八】第八(入緩)観(平)（観30-4）

【日】日(入緩)日（観3-6），皆見日(入緩)没(入急)（観14-2）

このような例から，-t 入声全体が開音節化していなかった時代でも，基本的な字においては開音節化することがあった，と考えられている。

一方本稿の筆者は，室町時代の経書では基本的な字の -t 入声もツで表記されており，同時代の他種資料と比べて異質な表記法がとられていたことを根拠とし，室町時代の経書において基本的な字であっても原則として -t 入声形が保存されることを述べた[10]。

前稿中，経書の -t 入声表記と対照するために用いた阪本龍門文庫蔵『仮名書き妙法蓮華経』江戸初期版（1–18。以下，「龍門文庫本」と呼称する）[11] では，「一」「七」「八」の諸字の -t 入声が「ち」で表記されることを述べた（ただし，「八」字には延べ６例，「つ」表記が出現していた）。ところが，龍門文庫本と同版の本を転写したと推定される佼成図書館蔵『めうほふれんげきやう』（古618–1～8／貴1–7E。以下，「佼成図書館本」と呼称する）[12] の「一」「七」「八」字には，-t 入声表記が龍門文庫本と異なる例があった。それぞれの用例数は次の通りである。

龍門文庫本（江戸初期版）「つ」表記
　→佼成図書館本「ち」表記：６例
龍門文庫本（江戸初期版）「ち」表記
　→佼成図書館本「つ」表記：11例

-t 入声の表記が転写の底本（江戸初期版）と転写本（佼成図書館本）との間で表記が入れ替わる実態を考慮すると，転写の段階で「ち」と「つ」の両表記が自由に交替した可能性が想定される。「ち」と「つ」で表記が自由交替するならば，開音節化したチ形と「ち」表記，-t 入声形と「つ」表記はそれぞれ結びついていないことになる。そのように仮定すると，法華経読誦音（法華経を字音直読するときの音）においては「基本的な字においても -t 入声形が保存された」と解釈される余地が残る。

この可能性を否定するためには，転写本である佼成図書館本を対象として -t 入声表記を調査し，-t 入声形の表記に「つ」が使用されていることを示すとともに，「ち」表記と「つ」表記の交代が自由に起こるものではないことを示す必要がある。しかし，前稿は経書の -t 入声についての論であったため，「八」字において両本の相違が大きいことを指摘した上で，「呉音直読資料における平易な字の -t 入声については，別に考える必要があろう」と保留した[13]。

1.3　本稿の目的

本稿では，佼成図書館本を主たる対象資料とし，佼成図書館本の -t 入声の大部分は -t 入声形で発音され，一部の基本的な字では開音節化して和語の「チ」と等しくなっていたことを示す。また本稿は江戸中期の佼成図書館本の -t 入声を主に扱うものの，室町末から江戸初期の法華経読誦音も，同様の状況にあったことを推定する。

本稿では「-t 入声形」「チ形」という用語を使用することがある。これらは表記を指す用語ではなく，音形を指す用語とする。大部分の -t 入声字（早くから開音節化した一部の字以外の -t 入声字）が開音節化するまでの段階として，次の A ～ C の段階を想定している。

A：２種の「寄生母音」[-tɨ̯, -tu̯] をもつ段階
B：「寄生母音」が [-tu̯] に統一された段階
C：開音節化した段階（＝[-tsu]）

本稿では論述の主眼を B の段階に置くため，便宜上 A ～ C のいずれの段階であっても，大部分の -t 入声字の音形を指して「-t 入声形」と呼ぶこととする。一方，大部分の -t 入声字に比べて早くから開音節化し，和語のチと等しくなったものを「チ形」と呼ぶこととする。本研究で主たる対象とする佼成図書館本の時代（1759年頃）には，大部分の -t 入声字も開音節化が完了し，C の段階に至っている可能性がある。本稿はこの可能性を否定するものではない。

また本稿では表記を論ずる場合，次のような表示方法をとる。仮名表記を包括的に示す場合には，「　」をつけずに表示する（例：チ表記，ツ表記）。一方個別資料における具体的表記を示す場合，「　」をつけて表示する（例：「つ」表記，「ツ」表記，「-t」表記）。

2. 研究の方法

2.1 佼成図書館蔵『めうほふれんげきやう』について

佼成図書館本は，字音直読の平仮名書き法華経である。当該文献は基本的な漢字も含め，経本文の字を全て平仮名で記す点に特徴がある。

本書巻第八の末尾には，増上寺の曇龍（1721–1772）[14] による，以下の識語がある（引用中の／は改行を示す。引用中の下線はいずれも引用者による）。

> 國字妙法蓮華經者中尾氏所書／也中尾氏名平岡東都人／静證太夫人之傅姆初侍紀第／以謹慎称及太夫人帰我／先侯隆德公從入白金邸公厚／遇之蓋蒙特恩云數十年而／公逝矣痛哭可知爾来歸心佛／乘私自勤修己卯之秋年／公之逝矣既十三年追年不已／乃書此經慕回冥福已卒業未／装而死時年七十五太夫人／憐之乃命装之遙寄蔵州之／妙解寺以令遂其志焉死者有／知豈不感泣而拜也哉且先所／書之経妙而難思則其功之大／亦多(?)可議也蓋太夫人恩恵／所成非獨此矣余既辱國恩／不能無盛於此擧因題其巻末／以所聞／宝暦十庚辰冬十二月／熊府沙門曇龍謹書于／東都縁山南渓中

識語によれば，佼成図書館本を書写したのは「静證太夫人」（細川宗孝の正室，友姫。1720–1780）の「傅姆」（乳母）であり，「東都人」であった「中尾氏」であるという（実線部の記述）。「中尾氏」は「隆德公」（細川宗孝。1716–1747）の死を嘆き仏教に帰依し，宗孝の冥福を祈るためにこの経を書写したものの，書き終えて装丁する前に，「己卯」（宝暦 9 年，1759年）に亡くなった。これを憐れみ「静證太夫人」が，装丁させ細川家菩提寺の「妙解寺」に預けたものがこの法華経のようである（破線部の記述）。

曇龍の識語によれば書写者は女性であると考えられ，仮名書きの法華経を書写したことも理解しやすい[15]。また識語の「己卯之秋年」以下の記述によると，本資料は宝暦 9（1759）年ごろ，江戸中期の写本であると考えられる。

佼成図書館本は，龍門文庫本と同版の江戸初期版を転写した資料であると考えられる。佼成図書館本は巻子本であるのに対し，江戸初期版は折本で外形上異なるものの，以下のような類似点がある。

まず，巻第一の冒頭から 3 行目まで，江戸初期版の龍門文庫本（略号龍）と佼成図書館本（略号佼）を並べて翻字する（■は破損により判読不可能の箇所）。

龍1　妙法蓮華經しよほん・だいいち　一
佼1　めうほふれんげきやう・じよほんだい一
龍2　によぜがもん・いちじぶつぢう・わうしやじやう・ぎしやくつせんぢう・よ
佼2　によぜがも■いちじぶつちう・わう

しやじやう・ぎしやくつせんぢう・よ

龍３　だいびくしゆ・まんにせんにんく・かいぜあらかん・しよろい

校３　だいびくしゆ・まんにせんにんく・かいぜあらかん・しよろい

このように，１行目の内題の書き方は異なるものの，そのほかの箇所は句切り点の位置も含めてよく一致する[16]。

また，両本の行取りは次の箇所を除いて全て一致している[17]。

巻第一：121–123，288–291，293，312–313，317，330–332

巻第五：477

巻第八：92

巻第一・五・八に上のように行取りの相違が見られる一方で，巻第二・三・四・六・七には行取りの違いがない。行取りが異なる部分は，両本の大きさの違いによる転写時のスペースの不足が原因であると考えられる。江戸初期版の龍門文庫本は縦の長さが 27.0 cm であるのに対し，佼成図書館本は 15.5 cm で，佼成図書館本の方が 11.5 cm 短い。そのため，江戸初期版と同じ字数を詰めようとすると，スペースが不足することがある。転写時にスペースが不足したとき，佼成図書館本は原本と異なる行取りで書写するものの，４行以内に調整して江戸初期版と同じ行取りに戻している[18]。

このほか佼成図書館本には，平仮名書きの本を転写したことによる誤写が見られる。以下に用例を挙げる。挙例中，龍門文庫本（江戸初期版）の（　）内の漢字は『大正新脩大藏經　第九巻　法華部上・華嚴部上』（1925年，大正新脩大藏經刊行會。1960年の再刊による）による。また，（　）内の数字等は「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース（2015年版）」[19] の所在表示方法の下７桁を示したものである。佼成図書館本の所在は，巻数（○で囲んだ数字）と行数で示す。その行数は，原本調査時（2019年７月20日）時点の装丁の状態で，各巻の内題を１行目として数えたものである。

龍こくをふ（国邑0016c05）

→校こくをん（②420）

龍てちゐせん（鐵圍山0033a28）

→校てらゐせん（④395）

龍だいいちほふ（第一法0039c16）

→校ざいいちほふ（⑤369，「た」の変体仮名「ゟ」[20] の誤認）

さらに，江戸初期版には日遠（1572–1642）『法華経随音句』の影響が指摘されている[21]。佼成図書館本にも，日遠の影響が反映されている。例えば，「窟」字の字音は「クツ」が広く用いられる中，『法華経随音句』では次のように「コツ」と読むべきことが示される。

經行禪窟（コツ）文・句解云・窟（コツ）・苦骨切（98–3）

江戸初期版でも「こつ」という表記が出現することから，『法華経随音句』との関連の深さが指摘されている[22]。「窟」字は佼成図書館本でも，次のように表記されている。

きやうぎやうぜんこつ（經行禪窟⑥273），きやうぎやうぎふぜんこつ（經行及禪窟⑥303）

これも，『法華経随音句』の影響下にある江戸初期版を転写したために生じたものであろう。

なお，室町末から江戸初期に用いられたという，-t 入声音と促音専用の仮名「ㇾ」[23] は，江戸初期版と佼成図書館本の両者に用いられてい

る。しかし，江戸初期版では巻第一・巻第二を中心として「ㇾ」が用いられているものの，後半の巻では「つ」との区別がつかない字体になる。一方佼成図書館本は，巻第八に至るまで「ㇾ」を使用し続けている。ただし，「ㇾ」と「つ」の違いがそのまま音価の違いを表しているかどうかは不明で，また区別が難しい例もあるため，本稿では区別せず「つ」として取り上げる。

2.2　研究の方法

本稿では，転写本における -t 入声の表記が問題となるため，佼成図書館本を主たる対象資料とする。

まず，佼成図書館本における -t 入声字全体がチ・ツのどちらで表記されているか調査し，-t 入声の「寄生母音」が統一された段階以降の状況にあることを示す。

次に，チ表記される -t 入声字を個別に検討し，いずれもツ表記と自由には交替しないことを示す。

また，転写の底本と推定される江戸初期版の龍門文庫本，ならびに江戸初期の法華経読誦音を解説した日遠『法華経随音句』の記述を参照する。法華経以外の資料として，ポルトガルの宣教師であるジョアン・ロドリゲス（1561頃–1633）『日本大文典』等の資料を参照し，室町時代から江戸初期頃の資料における -t 入声にも佼成図書館本の -t 入声の状態が確認されることを示す。

ただし，法華経読誦音のうち，陀羅尼の仮名表記は対象としない。陀羅尼には音注が付されるものの，漢字音とは別の枠組みの音注が付されるため，漢字音研究資料として直接用いることはできない。

3.　-t 入声の仮名表記と「寄生母音」

まず，佼成図書館本の -t 入声表記がどの段階にあるか調査するため，-t 入声の仮名表記と先行母音との関係を調査する。林史典の調査と同様，-t 入声字を先行母音別に分け，チ表記・ツ表記のそれぞれをとる異なりの漢字数を調査する。「逼」「般」字は中国語中古音で -t 入声字に属すものでないものの，日本漢字音において -t 入声と同等の振る舞いをすることが知られているため[24]，調査対象の字に含めた。

佼成図書館本の時代には促音もツで表記するのが一般的であるため，-t 入声と促音を区別する必要がある。-t 入声と促音は表記のみで区別ができないため，促音化する環境のものを機械的に取り除く。-t 入声はカ・サ・タ・ハ行が後接する環境で促音化することが知られているため[25]，カ・サ・タ・ハ行の子音が後接する環境を促音化環境と認定し，次の表からは除いた。

結果は，次の通りである（表１）。表中，太枠で囲んだ箇所は，もう一方の表記法よりも字数が多く出現したものである。

どの先行母音をもつ場合でも，ツ表記をとる字数が多い。この状況は「寄生母音」が一種類に統一された段階の表記法と一致する[26]。

表１　佼成図書館本の先行母音別 -t 入声表記

表記＼先行母音	i	e	a	o	u
チ	5	1	1	0	0
ツ	20	23	24	16	2

次の表２は，ツ表記のみをとる字を先行母音別に示したものである。

先行母音がどの母音であっても，ツ表記のみをとる字が広く認められる。先行母音が [u] のときにツ表記のみをとる字は２字にとどまるものの，表１によると先行母音が [u] の場合にはチ表記される字はないため，-t 入声の表記としては，先行母音がどの母音であってもツ表記のみをとる字が中心的であると言える。

表２　ツ表記のみをとる漢字

先行母音 i	悉實失蜜必疾畢溢嫉密篳逼逸吉匹膝慄櫁
先行母音 e	説滅別刹決設劣缺悦絶熱潔舌列裂殺穴血結蔑竊折
先行母音 a	薩脱曰闥達月渇末抹般竭跋鉢拔蝎活罰撮奪咄鈸颰察
先行母音 o	弗發物勿忽沒髮窟骨率拂欵訖乞卒勃
先行母音 u	佛出

先行母音がどの母音であってもツ表記のみをとる字が中心的である事実をふまえると，-t 入声は「寄生母音」が１種類に統一された段階以降の状況であると考えられる。この段階では，-t 入声形をチ表記することは一般的でないため，チ表記された例は開音節化した例であると予想される。

ただし，異なりの字数としては少数であっても，チ表記とツ表記が交替する字があることも事実である。それらの字を検討して，チ表記される字の特徴と，チ・ツ両表記が自由に交替するわけではないことを確認する必要がある。

4.　-t 入声の開音節化とチ・ツ表記の交替

以下，チ表記が認められる字の用例を検討する。

チ表記が見られる字の用例数を延べ数で表すと，次のようになる（表３。太枠箇所が本稿で取り上げる問題の箇所である）。

表３の「漢字」欄に見られるように，これらの中には基本的な漢字が多い。また，西本願寺蔵親鸞筆『観無量寿経註』『阿弥陀経註』でも開音節化例が見られた「一」「七」「八」「日」が，佼成図書館本でチ表記されている。この状況から，チ表記は開音節化した -t 入声（＝チ形）を示すと考えられる。

表３のうち，「日」「七」「律」字にはチ表記しか出現しないため，佼成図書館本に出現した

表３　チ表記例が見られる字

先行母音	漢字	チ	ツ	ツ（促音化環境）
i	一	256	2	345
	日	64	0	4
	七	13	0	46
	質	6	1	3
	律	1	0	0
e	鐵	11	1	0
a	八	52	12	41

全例が開音節化していたと考えられる[27]。一方，「一」「質」「鐵」「八」の諸字にはチ・ツ両表記が認められる。

以下，チ・ツ両表記が出現する「一」「質」「鐵」「八」字について，具体的な用例を検討し，それらチ・ツの両表記が交替する要因について検討する。

4.1　「一」字

「一」字のうち，256例がチ表記をとり，２例がツ表記をとる。

ふしやう<u>いつ</u>ねん（不生<u>一</u>念②407）
<u>いつ</u>みしすい（<u>一</u>味之水③59）

しかし，「一念」「一味」の語は，他所ですべて「いち」と表記されている。

【一念】（４例）：<u>いち</u>ねん（<u>一</u>念④210・213・⑥218・240）
【一味】（７例）：いつさう<u>いち</u>み（一相<u>一</u>味③34），いつさう<u>いち</u>みしほふ（一相<u>一</u>味之法③42），<u>いち</u>みしほふ（<u>一</u>味之法③90），ごほふ<u>いち</u>み（其法<u>一</u>味③71），<u>いち</u>みう（<u>一</u>味雨③87・99），じやうい<u>いち</u>み（常以<u>一</u>味③92）

もしチ表記とツ表記が自由に交替するのなら

ば，同程度の用例数が認められることが期待される。しかし，ツ表記は256例中２例にとどまる。２例のツ表記が出現する「一念」「一味」という語の中でも，ツ表記は例外的なものである。

橋本進吉は文禄元（1592）年版『ドチリーナ・キリシタン』について次のように述べる[28]。

> 入聲のツはｔと發音したのであるが，入聲でも「ち」と書く場合には，文字のまゝにチ（chi）と發音したと見えて「一道」（itdŏ）「別」（bet）を，また ichidŏ（序二頁）bechi（二二頁）と書いた所がある。

この記述から，「一」「別」の字には語形の揺れがあったことがうかがえる。『ドチリーナ・キリシタン』の「一」字において，-t 入声形を示す「it」表記をとるのは「言葉の和らげ」における次の例のみである[29]。

> Anjin, qetgiŏ no itdŏ. Taſucari uo ſadamuru michi. Caminho çerto da ſaluação.（107オ左）
> 翻字：安心決定の一道　助かりを定むる道
> *Caminho çerto da ſaluação.*

『ドチリーナ・キリシタン』では上例のほか44例「一」字が出現するものの，-t 入声はいずれも「chi」で表記されている。

このように，大多数はチ形をとる字でも，ごく一部は -t 入声形をとる場合もあったと考えられる。佼成図書館本に出現する「一」字のツ表記は，『ドチリーナ・キリシタン』における状況と同じものと考えられ，語形の一部の揺れと考えられる。「一」字全体にわたるチ・ツ両表記の自由交替とは考えられない。

4.2 「質」字

「質」字は，すべて「質直」の例である。用例はチ表記に偏るものの，ツ表記も出現する。

> 【チ表記】（６例）：しちぢきむき（質直無僞②65），しちぢきにうなん（質直柔軟②384），しちぢきいにうなん（質直意柔軟⑥144），にうわしちぢきしや（柔和質直者⑥155），しやうじやうにしちぢき（清淨而質直⑥246），ぜにんしんいしちぢき（是人心意質直⑧396）
> 【ツ表記】（１例）：じやうしゆしつじ(ママ)きぎやう（常修質直行⑤282）

これらの例を見ると，「一」字と同様に，「質」字はチ形に重心があるように見える。

確かに『日葡辞書』（1603年刊，1604年補遺）[30] においても，単字「質」が開音節化した形で出現する。しかし，この例は「質物」「人質」の意味をもつものである（下線は引用者による）。この意味では，現代日本語でもチで発音する。

> Xichi. *Penhor, ou refens: poſto que quando ſe toma por refens cõmummente ſe diz,* Fitojichi.（299ウ右）
> 訳：Xichi. シチ（質）質物・抵当，あるいは，人質．ただし，人質の意に用いる時は Fitojichi（人質）と言うのが普通である．（761左）

一方，「質直」の意味の「質」の例は『日葡辞書』において「-t」で表記された例がある。

> Bunxit. *Modo de engrãdecer, & ornar com palauras, comprimentos, &c. & ſingeleza no falar, & poucos comprimentos. O primeiro ſentido he de* Bun, *o ſegundo de* Xit.（26オ左）

訳：Bunxit. ブンシッ（文質）言葉を添え，おせじを言って，誇張したり飾ったりするさまと，話すのが素直で，おせじを言わないことと．上の最初の説明がBun（文）の意味であり，次のがXit（質）の意味である．（66左）

佼成図書館本に出現する「質」字は「質直」の一語のみであるため「質」字全体の揺れの状況をとらえることはできない。「質直」の例は江戸初期の中田祝夫旧蔵「仮名書き法華経」（訓読された法華経で，本稿で扱っている江戸初期版とは異なる）では次のように，ツ表記が出現するようである[31]。

しつじきにうなんにして（質直柔軟にして：「譬喩品」214）

一語の中の揺れである可能性が考えられるものの，さらに検討が必要である。

4.3 「鐵」字

「鐵」字の例は次のものである。

【ツ表記】（１例）：てつもくぎふよでい（鐵木及與泥①392）
【チ表記】（11例）：てちゐせん（鐵圍山④404），てらゐせん（鐵圍山④395，誤写例），だいてちいせん（大鐵圍山④395・405），だいてちゐせん（大鐵圍山⑥525・⑦284），しゆみぎふてちゐ（須彌及鐵圍⑥404），てちゐせんだいかい（鐵圍山大海⑥473），ぎふてちゐせん（及鐵圍山⑥525），てちゐぎふみろう（鐵圍及彌樓⑥535），せうてちいせん（小鐵圍山⑦284）

ツ表記の例は１例のみで，ツ表記される語の傾向を指摘することはできない。しかし，チ表記の例は「鐵囲山」（あるいは「鐵囲山」の意の「鐵囲」）に限られることが指摘できる。

この「鐵囲山」については，鎌倉時代の段階で開音節化したと見られる例が確認できる。「入声急」「入声緩」を区別する声点形式を有し，親鸞の字音を反映する龍谷大学図書館蔵『無量寿経』（021–129–2）でも，入声緩点が加点される[32]。

金(去) 剛(上濁) 鐵(入緩)囲(上)・一 切 諸 山(上)（上29ウ３）

また，龍谷大学図書館蔵『無量寿経』と同じく親鸞の字音を反映する西本願寺蔵『浄土三部経』正平６（1351）年存覚書写本朱点にも，同様に「鐵(入緩)囲(上)」の例があることが報告されている[33]。佼成図書館本においても，「鐵囲山」という語では「鐵」字がチ形で発音されていると考えられる。

一方「鐵」単字では，『日葡辞書』において次のように出現する。

Tet.　*Vt,* Tetno mono. *Couſa de ferro.*（補遺384オ左）
訳：Tet. てッ（鉄）例，Tetno mono.（鉄の物）鉄でできている物．（648右）

佼成図書館本でも「鐵木」の語ではツ表記されているので，「鐵」単字としては -t 入声形が使用されていたことが推測される。

4.4 「八」字

「八」字にはチ表記52例，ツ表記12例が出現する。チ・ツ両表記は同数でないものの，ツ表記が12例出現しているため，チ・ツ両表記の自由交替が疑われる。自由交替を否定するためには，チ・ツ両表記の交替に，何らかの条件があることを指摘する必要がある。

そこで「八」字の用例を語によって分類すると，A. チ表記のみが表れる語，B. チ・ツ両表記が表れる語，C. ツ表記のみが表れる語の三種に分類される。

A. チ表記のみ

【八萬】（26例）：はちまん（八萬①259・④205・471・⑧122），はちまんにん（八萬人①13・24），はちまんをく（八萬億③424・⑦355），はちまんしせん（八萬四千③432・434・437・529・⑦254・255・260・348・384・391・401・427・463・468・473・⑧259・281・314）

【八王子】（4例）：はちわうじ（八王子①107・109・154・184）

【八名】（2例）：はちみやう（八名①109・⑧184）

【八龍王】（1例）：うはちりうわう（有八龍王①29）

【八部】（1例）：てんりうはちぶ（天龍八部⑤99）

【八恒河沙】（1例）：くわはちごうがしやしゆ（過八恒河沙數⑤371）

【八生在】（1例）：よかくはちしやうざい（餘各八生在⑥203）

【八千】（1例）：ぜじはちせんしせんてんによ（是時八千四千天女⑧372）

B. チ・ツ両表記

【八十（チ表記）】（15例）：まんはちじつせうこふ（滿八十小劫①139），はちじつしゆめうかう（八十種妙好②23），いちひやくはちじつこふ（一百八十劫③329），おはちじふをつこふ（於八十億劫④258），ごぶつうはちじふをく（其佛有八十億⑦196），はちじふをくごうがしやせかい（八十億恒河沙世界⑦219），がしんろつひやくはちじふまんゆじゆん（我身六百八十萬由旬⑦377），はちじふまんをく（八十萬億⑤143・⑥220・228），ろつひやくはちじふまんをく（六百八十萬億⑥169），はちじふをくまんごふ（八十億萬劫⑥237），まんはちじふねんい（滿八十年已⑥335），ねんくわはちじふ（年過八十⑥337），ぐまんはちじつさい（具滿八十歳⑥375）

【八十（ツ表記）】（4例）：はつじつせうこふちう（八十小劫中①183），はつじつしゆがう（八十種好⑤26・82・97）

C. ツ表記のみ

【八解脱】（6例）：ぢうはつげだつ（住八解脱③164），ぎふはつげだつ（及八解脱④44），さんみやうはつげだつ（三明八解脱④66・⑥379），くはつげだつ（具八解脱③414）ぐはつけだつ（具八解脱⑥340）

【八道】（2例）：いかいはつだう（以界八道④378・⑥257）

チ表記とツ表記が自由に入れ替わるならば，どの語でもチ・ツの両表記が出現することが期待される。しかし，佼成図書館本の「八」を含む語において，チ・ツ両表記をとる語は「八十」のみである。そのほかの語にはチ表記かツ表記のどちらか一方のみが出現する。

チ表記とツ表記の交替は，語の出現頻度と関連しているわけではない。「八萬」は全26例出現し，全19例出現する「八十」よりも高頻度である。チ表記とツ表記の交替が語の出現頻度と関連するならば，「八十」よりも出現頻度が高い「八萬」において，ツ表記が出現する事が期待される。しかし，「八萬」にはツ表記が出現しないため，頻度との関連は否定される。

以上のことを考えると，チ表記とツ表記の交替は自由なものでなく，語が条件となって選択されるものと考えられる。

「八」字はチ表記の用例数の方が多いことを考えると，「八」字の単字の音はチ形が中心であったと考えられる。語によってチ表記とツ表

記の出現傾向が異なるのは，一部の語の中で -t 入声形が保存されていたためであると考える。

5.　室町～江戸初期における「八」字の -t 入声形選択

ここでは，チ・ツの揺れが特に大きい「八」字を対象とし，室町～江戸初期の他文献における記述や表記を求める。これによって，語によるチ・ツ表記の選択について，佼成図書館本書写時（江戸中期）より前においても，佼成図書館本と同様の実態であったことを示す。

5.1　龍門文庫本との対照

龍門文庫本（江戸初期版）と佼成図書館本のチ・ツ表記の揺れとして，特に「八」字における揺れが大きいことは，すでに前稿で述べた[34]。ここでは，龍門文庫本（江戸初期版）と佼成図書館本の「八」字におけるチ表記・ツ表記が入れ替わる例を再掲し，検討する[35]。

A. 龍チ表記→佼ツ表記（-t 入声形）

【八十】（１例）

龍はちじつせうこふちう（八十小劫中0005a26）

→佼はつじつせうこふちう（①183）

【八道】（１例）

龍いかいはちだう（以界八道0033a11）

→佼いかいはつだう（④378）

【八解脱】（６例）

龍ぢうはちげだつ（住八解脱0021b11）

→佼ぢうはつげだつ（③164）

龍ぐはちげだつ（具八解脱0025a14）

→佼くはつげだつ（③414）

龍ぐはちげだつ（具八解脱0046c19）

→佼ぐはつけだつ（⑥340）

龍ぎふはちげだつ（及八解脱0028a04）

→佼ぎふはつげだつ（④44）

龍さんみやうはちげだつ（三明八解脱0028b14・0047b08）

→佼さんみやうはつげだつ（④66・⑥379）

B. 龍ツ表記（-t 入声形）→佼チ表記

【八十】（２例）

龍はつじつしゆめうかう（八十種妙好0010c28）

→佼はちじつしゆめうかう（②23）

龍ぐまんはつじつさい（具満八十歳0047a29）

→佼ぐまんはちじつさい（⑥375）

C. 龍チ表記→佼ツ表記（促音形）[36]

（用例なし）

D. 龍ツ表記（促音形）→佼チ表記

【八生在】（１例）

龍よかくはつしやうざい（餘各八生在0044b21）

→佼よかくはちしやうざい（⑥203）

チ形と促音形との間で揺れる例（C，D）を除くと，-t 入声形↔チ形で揺れるのは，「八十」「八道」「八解脱」に限られる。「八十」は佼成図書館本においてチ・ツ両表記が見られた語であり，龍門文庫本でもチ表記（14例）・ツ表記（５例）の両表記が出現して揺れている。「八道」は佼成図書館本でツ表記のみが出現する語であり，龍門文庫本では，表記（１例）・ツ表記（１例）の両表記が出現している。「八解脱」は，龍門文庫本ですべてチ表記されていた一方で，佼成図書館本ではすべてツ表記されている。

このように，龍門文庫本（江戸初期版）と佼成図書館本の間で -t 入声表記が揺れている語は，両本それぞれの中でも揺れている語や，佼成図書館本でツ表記のみが出現する語に限られる。このことから「八」字における両本のチ表記とツ表記は，特定の語の中で交替していると考えられる。これは，両本において -t 入声表記としてチ表記とツ表記が自由交替していたことを否定する結果となる。

5.2　日遠『法華経随音句』の記述

日遠は江戸初期ごろに活躍した日蓮宗の僧侶であり，元和 6（1620）年に『法華経随音句』の草稿を作成している。『法華経随音句』は，韻書や韻図による理論を持ち込みつつ，日遠が法華経読誦音を論じているものである（ただし法華経読誦音の全てを，韻書や韻図によって演繹的に決定しているわけではない）。

『法華経随音句』の記述の中には，法華経本文の -t 入声字に対する次の注記がある（合字は開いて表記する）。

> 有八王子（平新濁）文　或人・八王子権現ニ・濫スル故ハツタウシト・ヨムカ好ト云ヘトモ・於二經文ニ一・如レ此用捨・無用シテ・只ハチ王子ト・可レ讀也（14–6）

この記述は，「有八王子」という句に対する注である。日遠によると「或人」は「八王子権現」と混同して「ハツタウシ」と読むのがよいとする，とのことである。そして日遠はこれを採用せず，経文では「只ハチ王子」と読むべきだということを示す。日遠は，「八王子権現」という語の場合には -t 入声の連声形を使用する一方で，そうでない場合にはチ形を用いるべきだと考えていたことがうかがえる。「只」という副詞を使用していることから，日遠は「八」字の単字としての音形をチ形ととらえていた，と考えられる。

『法華経随音句』での「八王子」の音形は，「八王子権現」という語であるか否かによって異なる。そのため，-t 入声形をとるか否かを決定する条件は語であると推定され，チ・ツ両表記の自由交替は起こらないものと考えられる。

5.3　ロドリゲス『日本大文典』の記述

江戸時代の初期に刊行されたキリシタン資料の記述を見る。

ロドリゲス『日本大文典』（*ARTE DA LINGOA DE IAPAM*, 1604–1608長崎刊）[37]の，「固有の文字を持ってゐる‘こゑ’の数名詞」（NOMES DOS NVMEROS COYE QVE TEM proprio caracter, ou figura.）では，数詞の読み方が挙げられている。当該箇所に挙げられる数詞のうち，-t 入声に関わる部分のみを引用する。（214丁表）

Ichi.	Fitotçu.	Fito.	1.
Xichi.	Nanatçu.	Nana.	7.
Fachi.	Yatçu.	Ya.	8.

このように，単字としての「一」「七」「八」はいずれもチ形である。

数詞に対しては，「ICHI（一）その他この種の数詞はそれに続く文字によってある綴字が別の形に変化することについて」（COMO ICHI, E OVTROS NVMEROS deſtes mudam algũas ſyllabas em outras conforme a letra que ſe lhe ſegue.）という項目が立てられ，多くは促音化によって変わる綴りについての説明がなされている。

この箇所で，「八」字の綴字の変化は次のように説明される（訳において，日本語のローマ字表記は原則として省略する）。

> ¶ Fachi, *por oito muda,* Xifŏ fatmen. i. Yatçu vomote. Xifŏ, Fappŏ, Faccanen, Fappiacu, Faccai, Fappŏ, Faccu, Faxxendo, Fatret, i. Quedzuru. Faſſai, Fappu, Faxxacu, Mampaxxen xecaiuo teraſu. *Dizemos* Fachifiqui, *por oito caualos*, & *nam* Fappiqui.（215丁裏）
>
> 訳：八の Fachi は次のやうに変る。四方八面，即ち，八つおもての意。四方八方，八ヶ年，八百，八戒，八方，八苦，八千度，八裂，即ち，けづるの意。八

才，八不，八尺，万八千世界を照す。
馬の八匹はハチヒキと言って，ハッピキとは言はない。（769頁）

上の例に見るように，単字としての「八」は「Fachi」で表記され[38]，一部の語が「Fat」で表記されている。この挙例のうち，「-t」表記をとる「八面」「八裂」の語については，『日葡辞書』補遺（1604年）でも次のように「-t」表記がとられている。

【八面】Fatmen. *Oito partes.*（347オ左）
【八裂】Fatret. Yatçuzaqi. *O raſgar, ou cortar oito partes.*（347オ左）

キリシタン資料においても，「-t」表記をとるか否かは，語が条件となって決まっていると考えられる。

5.4　複数の資料に見られる「八」字の -t 入声形

このほか「八」字を含む語の中には，複数の資料に共通してツ表記・「-t」表記が出現する語がある。次のような語である。

【一八】
・京都大学附属図書館清家文庫蔵『塵芥』（4–85／シ／１貴）清原宣賢（1475–1550）筆[39]
一八（下107オ７）
・東京大学文学部国語研究室黒川文庫蔵『和漢通用集』（特27–284）[40]
一八（８上２）
・『日葡辞書』補遺
Ichifat. *Hũa flor.*（355ウ右）
【尺八】
・『日葡辞書』補遺
Xacufat. *Idem.*（292オ左）
・京都大学附属図書館清家文庫蔵『宣賢卿字書』（4–85／セ／１貴）[41]
尺八（21オ５）
【八難】
・宝山寺蔵世阿弥自筆能本『江口』[42]
三ツハツナンノアクシユニ（三途八難の悪趣に 47–6）
・東京大学国語研究室蔵『謠開合仮名遣』[43]
八難　はつとつの字はなへ入て（36オ）
・『五帖一部御消息』の浄土真宗伝承音[44]
ファツナン〔Fa″tnan〕（「三途八難」の語）

これらの例の中には，資料同士が関連している可能性があるものもある。たとえば，『謠開合仮名遣』の例は能「江口」における注であるため，世阿弥自筆能本『江口』と関連することは考えられる。しかし，能本と浄土真宗伝承音のように，直接の関連を持たないと考えられる文献においても，共通する -t 入声形が認められる。資料間で共通する -t 入声形の語は複数認められるため，-t 入声形とチ形は自由に交替していたのではなく，語によって出現の程度が異なっていたと考えるべきであろう。

6.　ま　と　め

以下，本稿で述べたことをまとめる。

まず，佼成図書館本の -t 入声字の表記を調査し，-t 入声形表記として先行母音に関わらずツ表記を使用する段階にあることから，-t 入声の「寄生母音」が一種に統一された段階以降に属する表記体系であることを述べた。

また，-t 入声全体が先行母音にかかわらずツ表記される状況であっても，基本的な字においてはチ表記されるため，基本的な字においては開音節化していることを指摘した。

さらに，チ・ツ表記が交替する字については自由に交替するのではなく，語が交替の条件となっていることを述べた。このことは，-t 入声

字の発音と表記の結びつきを示すものと考えられる。また，これは佼成図書館本のみに限定されるものではなく，江戸初期の法華経読誦音を示す龍門文庫本や『法華経随音句』にも見られたほか，室町時代から江戸初期頃の他種の文献においても確認された。

本稿で取り上げた，法華経読誦音を示す資料（佼成図書館本，江戸初期版，『法華経随音句』）にもとづいて考えると，江戸時代初期～中期の法華経読誦音における -t 入声は，次のような状態であったと考えられる。

-t 入声の大部分：-t 入声形
一部の基本的な字：チ形

法華経読誦音の -t 入声は，基本的な字が開音節化する点で，キリシタン資料などの資料と同様の状況にあると考えられる。また，仏書字音直読資料の -t 入声という枠組みで考えるならば，鎌倉時代の親鸞自筆の字音直読資料（本稿で取り上げた西本願寺蔵親鸞筆『観無量寿経註』『阿弥陀経註』）と連続する状況であることも推測される。

一方，法華経読誦音の -t 入声は，前稿において指摘した室町時代の経書の状況とは異なっている。室町時代の経書では，基本的な字も含め，-t 入声字は全て -t 入声形で発音されることが原則であった。

本稿で示した法華経読誦音における -t 入声の状態は常識的なものであり，当時の学問的な資料において幅広く認められるものと推測する。しかし，資料ごとの -t 入声の実態は不明の点が多い。今後さらに，資料ごとの -t 入声の状態を実証的に明らかにしていく必要があると考える。

付記：原本調査にあたっては，佼成図書館の皆様，ならびに阪本龍門文庫の皆様には多大なるご高配を賜りました。記して，心より御礼申し上げます。

注

1）橋本進吉『キリシタン教義の研究』（1961年，岩波書店。初出は『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』1928年，東洋文庫）262頁。
2）林史典「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」（『国語学』第122集　1980年９月，武蔵野書院）58–59頁。
3）注２林論文65–68頁。
4）浅田健太朗「声明資料における入声音」（『国語学』第203号　2000年12月，武蔵野書院）89–91頁。
5）肥爪周二「書評　佐々木勇著『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　研究篇・資料篇』」（『国語と国文学』第87巻第９号　2010年９月，ぎょうせい）73頁，同『日本語音節構造史の研究』（2019年，汲古書院）406頁注３。
6）沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（1982年，武蔵野書院。初出は「漢字音に於ける促音の表示法」『国文学攷』第69号1975年10月，広島大学国語国文学会）1088頁。親鸞は，この声点形式を字音直読資料に用いていたことが，佐々木勇「親鸞使用の声点加点形式について―板東本『教行信証』声点の位置づけ―」（『訓点語と訓点資料』第129輯　2012年９月，訓点語学会）10頁により指摘されている。
7）本稿で「開音節化」とするのは，-t 入声の発音が和語「チ」「ツ」と同じものになった段階を示す。「寄生母音」が添加されている段階のものは，「開音節化」に含めない。
8）漢字によって示される字音形態素のことを便宜上「字」と呼ぶ。
9）佐々木勇「親鸞筆『阿彌陀經』『観無量壽經』の漢字音について」（『比治山大学現代文化学部紀要』第１号　1995年３月，比治山大学現代文化学部）28–29頁。用例は『増補親鸞聖人眞蹟集成第七巻』（2006年，法藏館）によった。用例の所在は複製本の柱に（　）で示された頁数と，行数による。用例の検索には佐々木勇「親鸞筆『佛説阿彌陀經』『佛説觀無量壽經』被字音注漢字索引上・中・下」（『比治山女子短期大学紀要』第27–29号　1992年10月・1993年３月・1994年３月，比治山女子短期大学）を使用した。挙例中，声点は平声点を(平)，上声点を(上)などというように（　）に括って小書きで示す。同様に，平声濁点は(平濁)，入声急点を(入急)などという形で，（　）内に必要な情報を示す。
10）坂水貴司「室町時代における経書の -t 入声」（『訓点語と訓点資料』第144輯　2020年３月，訓点語学会）14頁。
11）テキストは原本調査による。
12）テキストは原本調査による。
13）注10坂水論文18–19頁注35。
14）『淨土宗全書』第18巻（1931年再版，淨土宗典刊行會）504–505頁には，曇龍の伝記が挙げられている（引用中の中略や下線は引用者による）。
　　騰譽曇龍上人

師諱曇龍。號二昇蓮社騰譽一。肥後熊本人。幼投二于州阿彌陀寺一。薙染。亡レ何東游。籍二緣山一。入二於圓海大和尚堂一。師二事之一。眞積力久。學通二内外一。名實俱茂矣。貫首妙譽大僧正選使三師幹二寺務一。奉職精勤。臨レ事明決。（中略）而師罹レ疾。竟以不レ起矣。實明和壬辰四月十七日年五十二。臘卅六。葬二于緣山墓一矣。

下線部の記述より，「明和壬申」（明和９年，1772年）に52歳で逝去していることから，宝暦10（1760）年に識語を加えていることに不自然な点はない。また，「亡レ何東游。籍二緣山一」は，識語の記述の「于／東都縁山南渓中」（＝増上寺）と一致する。さらに，熊本藩の細川宗孝に関する話題を識語に記している点も，「肥後熊本人」の曇龍であることと関連すると考えられる。以上より，識語の「曇龍」と増上寺の「騰譽曇龍上人」は同一人物であると考えられる。

15）親鸞の妻，恵信尼（1182–1168?）の『仮名書き無量寿経』など，女性の仮名書き経典には類例がある。

16）佼成図書館本は原則として法華経の品の名称を平仮名で書く。しかし，巻第四の「見塔品」のみ，「妙法蓮華經見塔品第十一」と漢字で書いている。この漢字の書風は漢字を書き慣れていない人物が書いたかのような書風である。

17）佼成図書館本には錯簡があり，巻第六の35行目から82行目までの一紙は，巻第一の60行目と61行目の間に本来あるべきものである。行取りはこの錯簡を正したものとして調査した。

18）この状況については，坂水貴司「日本語音韻史研究と佼成図書館所蔵古文献」（『CANDANA』第281号　2020年４月，中央学術研究所）３頁で述べた。

19）「SAT DB」https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php（2020年12月25日確認）

20）本稿で変体仮名を使用する場合，すべて「学術情報交換用変体仮名」を使用し，表示には「NINJAL 変体仮名フォント」を使用した。「学術情報交換用変体仮名」は，独立行政法人情報処理推進機構（IPA）と大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所（NINJAL）の著作物である。

21）小川栄一「月瀬文庫蔵「字音仮名書法華経」の字音表記について」（『国語学論集　中田祝夫博士功績記念』1979年，勉誠社）156頁。『法華経随音句』のテキストは中田祝夫編『日遠著　法華経随音句』（1971年，勉誠社）所載の寛永20（1643）年版による。所在は複製本の頁数・行数によった。

22）注21小川論文152–154頁。

23）土井忠生『吉利支丹文獻考』（1963年，三省堂）318頁，菅原範夫「室町時代の平仮名資料に見られる一表記法―入声音・促音表記を中心として―」（『国文学攷』第65号　1974年11月，広島大学国語国文学会）41頁など。

24）「逼」字については佐々木勇「中世浄土真宗資料に見られる急・緩入声点と舌内入声音」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部（文化教育開発関連領域）』第60号　2011年12月，広島大学大学院教育学研究科）321頁など。また「般」字は「般涅槃」等の語において出現するもので，注２林論文64頁表６でも用例として取り上げられている。

25）濱田敦『国語史の諸問題』（1986年，和泉書院。初出は「促音と撥音（上）」『人文研究』第１巻第１号　1949年11月，大阪市立大学文学部）49–50頁，注６沼本著書（初出は「漢字音に於る促音の表示法」『国文学攷』第69号　1975年10月，広島大学国語国文学会）1099頁。

26）注２林論文65頁。

27）「律」字は現代日本漢字音で「リツ」を基本とするため，チ表記のみが出現するのは異例のように思われる。佼成図書館本における「律」字（１例）のチ表記例は，現代でも「リチ」と読まれる「律儀」の例である。平成22年内閣告示第２号「常用漢字表」でも，「リチ」は１字下げで示される「特別なものか，又は用法のごく狭いもの」で，「例」欄には「律儀」が挙げられている。「律」字を含む語のうち，例外的に開音節化する語が，佼成図書館本に出現したとみるべきであろう。

28）注１橋本著書264頁。

29）テキストは『東洋文庫善本叢書２　重要文化財ドチリーナ・キリシタン　天草版』（2014年，勉誠出版）による。漢字仮名交じりの翻字は，注１橋本著書196頁によった。

30）テキストは『日葡辞書』（1973年，勉誠社。1975年の再版による）所載のオックスフォード大学ボードレイアン文庫蔵本により，所在は丁数・表裏・左右で示した。『エヴォラ本　日葡辞書』（1998年，清文堂出版）所載のエヴォラ公立図書館蔵本も参照した。訳は，土井忠生ほか訳『邦訳日葡辞書』（1980年，岩波書店）により，所在は頁数・左右で示した。

31）野澤勝夫「「月ヶ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字（二）」（『紀要』第48号2012年３月，弘前学院大学文学部）88頁。この写本の書写年代の推定は同「「月ヶ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字（一）」（『紀要』第47号2011年３月，弘前学院大学文学部）111頁による。

32）テキストは「龍谷大学図書館貴重資料画像データベース」http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/top.html（2020年12月25日閲覧）による。当該資料が親鸞の字音点を反映することは，佐々木勇「龍谷大学蔵『無量壽經』の訓点について―定家仮名遣による訓読点と親鸞の字音点―」（『鎌倉時代語研究』第16巻　1993年６月，武蔵野書院）40頁で指摘されている。

33）注24佐々木論文318–319頁。

34）注10坂水論文18–19頁注35。

35）注21小川論文135–136頁によれば，江戸初期版においても，-t 入声の大部分は「つ」表記され，「一」「七」「八」「質」「鉄」（本稿では「鐵」と表記）「日」「吉」の諸字に限り，「ち」「つ」両表記が見られるという。佼成図書館本では「吉」の表

記が「つ」に統一されている点で異なるものの，残りの諸字は江戸初期版と佼成図書館本とで「ち」表記される点が共通する。このことから，江戸初期版で「寄生母音」は一種に統一されていたことが推測される。

36）次の例は，龍門文庫本においてもともとあった「つ」表記が擦り消され，「ち」表記に修正されているものである。擦り消し前の，龍門文庫本にもともとあった本文は佼成図書館本と一致する。
龍いちざんしゐ（一飡之意0017b06）
佼いつさんしゐ（②475）

37）テキストは『日本文典』（1976年，勉誠社）により，所在は丁数と表裏で示す。また日本語訳は土井忠生訳『日本大文典』（1955年，三省堂。同年９月の再版によった）により，所在は訳書の頁数で示す。

38）ロドリゲス『日本語小文典』（７オ）でも，「一 Ichi」「七　Xichi」「八　Fachi」のように挙げられている。テキストは，福島邦道編『日本小文典』（1989年，笠間書院）所載のロンドン大学オリエント・アフリカ研究所蔵本による。

39）テキストは京都大學文學部國語學國文學研究室編『清原宣賢自筆伊路波分類體辭書　塵芥』（1972年，臨川書店）による。所在は巻の上下・丁数・表裏・行数で示す。

40）テキストは中田祝夫ほか編『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引―影印篇―』（1980年，勉誠社）による。所在は複製本所載の写真番号と上下段・行数で示す。

41）テキストは京都大學文學部國語學國文學研究室編『分類體辭書　宣賢卿字書』（1972年，臨川書店）による。所在は丁数・表裏・行数で示す。

42）テキストは月曜会編『世阿弥自筆能本集　影印篇』（1997年，岩波書店）による。所在は複製本の頁数と行数で示す。

43）テキストは『謠開合仮名遣』（1953年，石川国語方言学会）の翻字による。底本は東京大学国語研究室蔵本。所在は原本の丁数・表裏で示す。

44）福永静哉『浄土真宗伝承音の研究』（1963年，風間書房）158頁の挙例による。音声表記も，福永著書のものを引用した。

参　考　文　献

浅田健太朗「声明資料における入声音」（『国語学』第203号　2000年12月，武蔵野書院）

小川栄一「月瀬文庫蔵「字音仮名書法華経」の字音表記について」（『国語学論集　中田祝夫博士功績記念』1979年，勉誠社）

坂水貴司「室町時代における経書の -t 入声」（『訓点語と訓点資料』第144輯　2020年３月，訓点語学会）

坂水貴司「日本語音韻史研究と佼成図書館所蔵古文献」（『CANDANA』第281号　2020年４月，中央学術研究所）

佐々木勇「親鸞筆『佛説阿彌陀經』『佛説觀無量壽經』被字音注漢字索引　上・中・下」（『比治山女子短期大学紀要』第27–29号　1992年10月・1993年３月・1994年３月，比治山女子短期大学）

佐々木勇「龍谷大学蔵『無量壽經』の訓点について―定家仮名遣による訓読点と親鸞の字音点―」（『鎌倉時代語研究』第16巻　1993年６月，武蔵野書院）

佐々木勇「親鸞筆『阿彌陀經』『観無量壽經』の漢字音について」（『比治山大学現代文化学部紀要』第１号　1995年３月，比治山大学現代文化学部）

佐々木勇「中世浄土真宗資料に見られる急・緩入声点と舌内入声音」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部（文化教育開発関連領域）』第60号　2011年12月，広島大学大学院教育学研究科）

佐々木勇「親鸞使用の声点加点形式について―板東本『教行信証』声点の位置づけ―」（『訓点語と訓点資料』第129輯　2012年９月，訓点語学会）

菅原範夫「室町時代の平仮名資料に見られる一表記法―入声音・促音表記を中心として―」（『国文学攷』第65号　1974年11月，広島大学国語国文学会）

土井忠生『吉利支丹文獻考』（1963年，三省堂）

沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（1982年，武蔵野書院）

野澤勝夫「「月ヶ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字（一）」（『紀要』第47号2011年３月，弘前学院大学文学部）

橋本進吉『キリシタン教義の研究』（1961年，岩波書店）

濱田敦『国語史の諸問題』（1986年，和泉書院）

林史典「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」（『国語学』第122集　1980年９月，武蔵野書院）

肥爪周二「書評　佐々木勇著『平安鎌倉時代における日本漢音の研究　研究篇・資料篇』」（『国語と国文学』第87巻第９号　2010年９月，ぎょうせい）

肥爪周二『日本語音節構造史の研究』（2019年，汲古書院）

福永静哉『浄土真宗伝承音の研究』（1963年，風間書房）

引　用　資　料

京都大學文學部國語學國文學研究室編『分類體辭書　宣賢卿字書』（1972年，臨川書店）

京都大學文學部國語學國文學研究室編『清原宣賢自筆伊路波分類體辭書　塵芥』（1972年，臨川書店）

月曜会編『世阿弥自筆能本集　影印篇』（1997年，岩波書店）

浄土宗典刊行會編『浄土宗全書』第18巻（1931年再版，浄土宗典刊行會）

土井忠生訳『日本大文典』（1955年，三省堂。同年９月の再版による）

土井忠生ほか訳『邦訳日葡辞書』（1980年，岩波書店）

中田祝夫編『日遠著　法華経随音句』（1971年，勉誠

社）
中田祝夫ほか編『印度本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引―影印篇―』（1980年，勉誠社）
野澤勝夫「「月ヶ瀬本仮名書き法華経」解説並びに翻字（二）」（『紀要』第48号2012年３月，弘前学院大学文学部）
平松令三ほか編『増補親鸞聖人眞蹟集成　第七巻』（2006年，法藏館）
福島邦道編『日本小文典』（1989年，笠間書院）
『謠開合仮名遣』（1953年，石川国語方言学会）
『エヴォラ本　日葡辞書』（1998年，清文堂出版）
『大正新脩大藏經　第九巻　法華部上・華嚴部上』（1925年，大正新脩大藏經刊行會。1960年の再刊による）
『東洋文庫善本叢書２　重要文化財　ドチリーナ・キリシタン　天草版』（2014年，勉誠出版）
『日葡辞書』（1973年，勉誠社。1973年の再版による）
『日本文典』（1976年，勉誠社）
「龍谷大学図書館貴重資料画像データベース」http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/top.html（2020 年12月25日閲覧）
「SAT　DB」https://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/satdb2015.php（2020年12月25日確認）